
ヤヌスの使者

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤヌスの使者

【Nコード】

N3007B

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

どんなに改心し、どんなに許しを乞うたところで、情状酌量の余地はない何故ならこの世は・・・生まれながらにして罪を背負ってきた罪人たちの処刑場なのだから・・・

1)

男の息遣いが突然荒くなった。

生臭い息が顔にかかる。

強烈な腐敗臭だ。

男はエリカの腹の上で、恍惚とした表情をする。

あ、ああ・・・

イク、イクイク・・・イクよおー！！！！

生暖かい液体が、口元から、下あご、首筋を流れていった。

男とあたしの身体の一部は繋がっているけど

あたしの心はあたしの身体と繋がってはいない。

あたしの心はいつもマサトと一緒に。

あたしはマサトのためならなんでもする。

こんな薄汚い、豚のような男とファックする事だっぺっちやら。

エリカはバスルームでシャワーを浴び、身体にまといつく男から排泄された粘着質の汚物を、全身の皮膚が真っ赤になるほど強く擦って洗い流した。

バスローブを羽織り部屋に戻ると、ベッドの上で男が満足げな顔でタバコをふかしていた。

サイドテーブルの上には、折りたたまれた一万円札が三枚、メモ用紙の間に挟まれていた。エリカは無言のままそれを抜き取ると、

バッグの中にしまい込んだ。

…この紙切れさえあれば、あたしはいつまでもマサトと繋がっていられる。

男が言った。

「何か、美味しいものでも食べて帰ろうか」

「やめとく……。次の予約があるから」

「クリスマスだっていうのに、ずいぶん稼ぐんだね」

エリカは男の顔を見もせず、下着を着けた。

高層のホテルを出ると、すでに陽は落ち、街は夕闇に紛れていた。街中がクリスマススのデコレーションで彩られ、イルミネーションのアーティフィシャルな光が心を躍らせた。

エリカは目の前の雑踏の中を透り抜け、マサトとの待ち合わせ場所へと急いだ。

途中、あるレストランの前に飾られた一本の大きなクリスマスツリーに魅せられ、エリカは足を止めた。

赤や緑のリボン。金色のベル。店の中から流れてくるクリスマスソングのメロディーに合わせ、様々な色の光が点滅していた。

ウィンドー一枚隔てた店の中は、エリカの立っている側とはまるで別世界のようだった。

楽しげに語り合う恋人同士や家族連れ。テーブルごとに、それぞれの世界があつて、そこでどんな会話がされているのか、想像するだけでも楽しい。

エリカの顔も自然とほころんだ。できれば、このまま大きなガラス窓に顔をくつつけて、いつまでも中を覗いていたいと、エリカは思った。

しかし、彼女の顔は突然歪んだ。

…マサト？…

エリカの視線の先に、マサトの楽しげに笑う姿が映った。向かい合わせには、襟ぐりにファーを縁取った白いセーターを着た女…。

まるで雪ウサギのようだ。カールされたオレンジアッシュのセミロングの髪が小刻みに揺れている。顔はよく見えないが、マサトと一緒に笑っているに違いない。自分より10才以上は若くみえる。マサトの好みの女だ。

…そんな、ばかな。あるわけないよ。

マサトはハイランドタワーの1階であたしを待っているんだから。

更に中を覗こうとしたが、女が微妙に座り位置を変えたので、マサトの顔は見えなくなった。

「いらつしゃいませえ。お待ち合わせですか？」

店の中からウェイターが出てきて、突然エリカに声を掛けた。

エリカは驚き、逃げるようにその場を立ち去った。

ハイランドタワーのロビーに飾られた、真っ白い大きなツリーの周りには待ち合わせをする人、手を繋ぎあってツリーを眺めるカップル、携帯で写真を取り合う数人のグループなど、沢山の人が行き来していた。

エリカの携帯電話が鳴った。

あつ、エリカ？

ごめん、ごめん。今日はさ、急用入っちゃって。行けなくなっちゃったんだよ。

今、何処にいるの？

今？・・・病院。

病院？

親父が入院したんだ。また、連絡するから。ほんとごめん。じゃねえ。

一方的にそれだけ言って、電話は切られた。

父親は3年前に死んだと言っていた。

電話の向こうに、かすかにクリスマスソングが流れていた。

半分は予期していた。こういう結果になることを・・・。

10メートル程もあるクリスマス・ツリーの先端には、大きな光る星がエリカをあざ笑うかのように輝いていた。雪を模った、真っ白なモミの木の葉先に付いた細かいグラスファイバーがプリズムを作り、ツリーの下の水をしたためたためた池に、七色の光を反射させ、きらきらと輝いていた。

「もう、遅かったじゃーん！」

隣りで立っていた女が、突然大きな声で叫んだ。

待ち合わせ相手がやってきたのだ。

「ごめん、ごめん」

「なんかプレゼント買ってくれたら許してあげるっ」

女は甘えた声を出し、男の腕にしがみついた。

二人は抱き合い、エリカのそばから遠ざかって行った。去り際に女は一瞬後ろを振り返り、エリカを哀れむような表情を見せた。

F u c k ! F u c k i n ' m y l i f e !

汚い、汚い、汚い・・・汚い獣だらけの世界だ。

高層ビル街を、駅の方向へとエリカは真っ直ぐに歩いた。

両サイドにそびえ立つ高層ビルの連なりが、今、一瞬にして崩れ去り、何もかも瓦礫の下に埋まってしまえばいいんだとエリカは思った。

あたしが消えてしまえばいいんだ。

ははは・・・あたしが消えてやる。

2)

自宅に戻るなり、エリカはパソコンの電源を入れた。

そして、キーボードに j i s a t u と打ち込み、漢字変換した。

【 自 殺 】 の検索結果 約 2 1 , 1 0 4 , 2 9 4 , 2 1 9 件

その多くが自殺防止対策、自殺関連ニュースなどの内容だった。そう言った内容のものをスキップし、URLを丹念にひとつひとつ開いていった。

中には、自殺の様々な方法を紹介しているサイトなどもあった。

自殺クラブ、自殺同好会、自殺グッズ・・・ポップアップ画面で紐やら、スプレーやら訳もわからない自殺グッズらしきものや、自殺の名所の地図などがまるでアダルトサイトの様に飛び出してきた。

あちこち検索しているうちに、英文のサイトに入った。

Why don't you commit suicide
tonight?
You can come to the another
world with comfortable feeling,
if you use this tool.
You do not have to be trouble
d anymore.
Please click the lower button
right now.

ふうん。心地よく簡単にあの世へ逝けるってことか。

エリカはこの文章に惹きつけられ、注文ボタンをクリックした。
カード決済だった。

数日後、海外からの航空便で小包が届いた。

縦横30X30、高さ20センチほどのダンボール箱だった。

早速、箱を開け中を覗いてみた。

真空のビニール袋の中には、肌色をした塊が入っていた。なんの
形かは容易に判断しかねた。

説明書には小さな文字で英文がぎっしり書かれていた。読むのが
面倒だったので、誰もがそうするように、とりあえず箱からビニ
ール袋を取り出し、ハサミで切り開け、中身を出した。

それは人間の肌のような色をし、硬いゴムボールのような感触だ
った。子うさぎくらいの塊だ。エリカは両手の上にそれを載せてみ
た。形からは使用方法はまったく検討がつかない。

しかし、手の平の上に載せてじっと見ていると、それは少しずつ
大きくなっていくような気がした。

実際それは大きくなっていった。どんどん膨張をはじめエリカの手の手では抱えきれなくなり、ずしんと、床の上に落ちた。それは、床の上に落ちてもどんどん膨張を続け、人間の身体くらいの大きさになった。と、いうよりは人間の身体そのものだった。

青い瞳の金髪男子だった。鼻も唇も手も足もその他の付属品も全て、人間の身体と同様に備え付けられていた。

辞書を持ち出し、もう一度調べた。

come

【米俗語】イクの意、とあった。

エリカは目の前に横たわるフィギュアを見て、笑い出した。ひとりで散々笑った後、大きなため息をついた。

…あんた、命の恩人ってわけね。

しかも、よくよく見たらあたしのタイプだし…。

あーっ！睫毛も付いてる。しかも、こっちの方にも…

これって本当の人毛？

まさかね。

A natural rubber resin process
sing product...
(a part, distensibility silicon use)
It will be expanded in the air.

更に必要個所のみ辞書を引きながら

…ふーん、天然ラバ樹脂製、一部、膨張性シリコン使用か

リモコンも付いてる。
名前はアレックス

「アレックス・・・」

エリカは声に出して呼んでみた。

驚いた事に、アレックスは瞬きをした。

「アレックス、アレックス、アレックス」

呼んだ回数だけ瞬きをした。

「すんごい・・・」

発売元は、東南アジア。製造元はヤヌス島。聞いた事もない。

エリカは、実際その感触を自分の手で触れて、試してみたくなかった。戸惑いはあった。しかし、すでに日本円にして約20万円支払っている。貨幣価値の違いとは言え、20万にしては信じられないほどの精巧さだ。

誰にも遠慮する事はなかった。自分のものだ。エリカは恐る恐る、その二本の脚の付け根の真中に植毛された人工毛に触れてみた。

本物と些して変わらない。柔らかな、いい感触だった。

続いて人工毛の中に横たわる、筒状のものにも触れてみた。やはり柔らかな、いい感触だった。ついでにその下に垂れ下がる双球状の物体にも触れてみた。当然、柔らかな、いい感触だった。

エリカは筒状のものを間近で観察した。精巧な造りだった。そして、手を触れていると、それは次第に容量、強度を増していった。エリカの瞳は潤いを増し、内側から沸々と湧き上がる情意の高まりを感じた。

「ステキ・・・」

エリカは思わずフィギュアの上に跨った。

「あ、ああ・・・アレックス」

アレックスの長い睫毛は瞬いた。

エリカは碧い大海に繋がる、小さな入り江でひとり小船を漕ぎはじめた。さざ波の音が響いてきた。心地よい波の流れに身をまかせた。

アレックスの瞳は海の色と同化し、ブルーダイヤモンドのように何処までも碧く深い輝きを發した。

エリカはリモコンを取り出し、適当にボタンをひとつ押してみた。筒状のものが、エリカの中で右回転を始めた。

今度はその下のボタンを押した。それは逆回転をした。

また、長方形ボタンのレバーを下方方向に移動すると、押されたボタンの動作に強度が増された。当然レバーを上によけると動作は微弱化する。

そして、今度は一番下のボタンを押してみた。

ウーン・ウーン・ウイウイウーン・・・

機械的な振動音と共に、胴体と両脚を繋ぐ関節部分が上下運動をはじめ、更に強弱レバーを下げると、上下運動は激しさを増した。

エリカは荒れ狂う競走馬を操る勇敢な一騎手となった。広大な黄土の荒野をエリカは競走馬と共に駆け抜けた。

競走馬の動きに合わせて、エリカの長い黒髪は踊るように舞った。

ウーン<ウーン<ウイウイウーン<ウイウイウーンウイ
ーン

<ヒヒーン<ヒヒーン<ヒヒーン<ヒヒーン<ヒヒーン<ヒヒーン<

・
・

荒れ狂った駿馬がいなくな度に、エリカは高みへと昇り詰めていった。

目蓋を閉じると、世界が一転した。

明るい太陽の光が血汐を真っ赤に反転させ、そしてそれは太陽フレアのように持続的なバーストを繰り返した。

エリカは嘗て味わった事のない、至上の喜びに浸った。

この世に天国があるとすれば

それは愛する相手との情交の時の

絶頂の瞬間である。

(ヴコロウスキー)

3)

RRRRRRRRRRRRR.....

日曜日の朝から、携帯電話の着信音がけたたましく鳴った。

「エリカ？久しぶりじゃないん。元気だった？」

聞きなれたマサトの声だった。クリスマス・イヴの夜以来ひと月近く経っていた。

「まあね.....」

「元気ないじゃん。どうしたの？あつ、わかった。こないだの事まだ怒ってるんだ。あの日は仕方なかったんだ。ごめん、あやまるよ」

「別に、怒ってなんかないよ.....」

「そう？ならいいんだけど。ところで親父が入院したって言ったじ

やん。癌なのよ、癌。でもって、俺、今定職に就いてないじゃん。いちお、プロのミュージシャン目指してっからさ。だから肉体労働なんかして、魂擦り減らしたくないわけよ」

「そう……」

「そうって、なんかエリカ冷たいなあ」

「で？」

「お金貸してくんないかな……」

どうせ、そんな事だろうと思った。

みえみえの嘘をつき、年上の女の母性をくすぐるその甘えた口調で、金をせびるのだ。お決まりのパターンだ。

エリカの渡した金は所詮パチンコや競艇、それにブランド物の時計や靴に消えていくのだ。当然女にだって使っているに違いない。それを、わかっていながら断れない自分がいた。

しかし、それは今までの話した。

「で、いくら？」

「とりあえず、100万……いや20万」

「そう……。お金ないんだ」

「だから、わかってんだろ？」

エリカは携帯電話を耳から遠ざけ、ベッドの方向を眺めた。アレックスは眼を閉じ、ベッドの中で眠っている。リモコンボタンでおやすみモードに入っているのだ。まるで本当に眠っているようだ。

その、端正な顔立ちにエリカは暫し見惚れた。

「エリカー！聞こえてんのかよう！」

携帯の中からマサトの叫ぶ声がした。

「イヴの夜、レストランと一緒にいたあの女。あの女、貸してくれないの？もしかして、今だって隣りにいるのかもね」

「エ、エリカ……何、言ってるんだよお前。俺の愛してるのはエリカだけだよ。わかってんだろ？」

「もう、あたしをダシに使うのはやめてよ。今まで貸したお金。1000万は下らないと思うよ。今さら返してとは言わないけどね。言ったところであんた、返してくれるような誠実な男じゃないって事くらい百も承知だからね。ただ・・・もう、お願いだから二度と電話してこないでっ！」

そうやってエリカは自分から携帯のOFFボタンを押した。

これっきりだ。正直言つて哀しかった。しかし、涙は出てこなかった。マサトの愛情がないことを知っていながら、金で繋ぎとめていた自分がバカだっただけ。

そう・・・、それだけ・・・。

それに気づかせてくれたのは、アレックスだった。

もう、汚い出張ヘルスの仕事をやる必要もない。年齢を偽りセーラー服やメイドの格好をし、臭いオヤジどもの相手をする必要もない。

普通に暮らしていれば、昼間の貿易会社の事務職だけで収入は充分なのだ。

エリカはハムエッグとサラダを作り、トーストを焼き、コーヒーを入れた。二人分の朝食の準備ができると、ベッドの中で眠っているアレックスの側に近寄り、ベッドの脇に膝をついて、アレックスの唇に軽くキスをした。

「アレックス、朝だよ起きて。食事の準備ができたよ・・・」

エリカはそう言つて、リモコンのお目覚めボタンを押した。

アレックスは長い睫毛を開け、青い透き通った瞳でエリカを見つめた。

エリカはアレックスの着ていたパジャマを脱がせ、カルバン・ク

ラインのボクサーパンツに、アンダーシャツを着け、シーンズとトリーナーを着せた。

二人はテーブルに向かい合い、気だるい日曜日の遅めの朝食を摂った。

「あはは・・・アレックスの髪、寝癖ついてるよ」

エリカは、その髪を手で直してやりながら、この上ない幸せを感じた。

アレックスは何もしゃべらない。だけど、エリカにいやな事を強要することもなし、エリカを決して裏切らない。エリカが必要とするときは、彼女を思う存分愛してくれる。

アレックスとの生活は、穏やかで幸せに満ちていた。

アレックスが来てから、約一年の月日があっという間に流れた。

「最近ずっと、ご無沙汰だけどもさあ。たまには飲みに行かない？今日クリスマス合コンあるのよ。どうしてもメンバーひとり足りないんだ。イケメン来るらしいから、エリカも一緒に行こうよ」

ロッカールームで帰りの準備をしているエリカに、同僚の明日香が声を掛けてきた。

「ごめん。アレックスいるから。あつ、い、犬よ。犬・・・」

「・・・犬？犬なんか飼ってたの？」

「うん。ごめん、また、今度ね」

「つきあい、わるいなあ。もう、いつも」

エリカは急いで会社を出た。

街はクリスマスのデコレーションで彩られていた。

クリスマスなんだ。エリカは、去年のクリスマスを思い出した。

哀しいクリスマスだった。

今年は違う。アレックスがいる。アレックスは何処にも行かないで私を待っていてくれる。

エリカは、自宅に帰る途中、駅前のデパートへ立ち寄った。

アレックスのクリスマス・プレゼントを買うのだ。

4階の男性用品売り場を見た。クリスマス・プレゼント用の特設会場には

男性用のマフラー、帽子、セーター、時計、財布、ライターなどが様々ラッピングされ展示されていた。

エリカはニットの帽子とマフラーを買った。店員は赤と緑の包装紙に金色のリボンをかけて持ってきた。

早く帰って、アレックスを驚かしてあげよう。

しかし、バッグを抱え、戻りかけるエリカの眼に入ったのは、幸せそうな顔をしてプレゼントを探す女性客や、楽しげにショッピングをするカップルたち。

エリカはそんな様子を見て、ふと、哀しくなった。

一方通行だ。

アレックスはいつものように、あたしが帰るまでベッドの中で眠っているんだ。あたしが帰らなきゃアレックスは起きれない。ひとりで立ち上がることもできないし、クリスマスだからってあたしには、なーんにもプレゼントしてくれない。

エリカは肩を落として、下りのエレベーターに乗った。

1階のアクセサリー売り場の前を通り抜けたとき、エリカは思いついたように一旦立ち止まり、また引き返した。

ガラスケースの中をしばらく覗き込んでいたエリカは、ティファニーのペアリングを買った。

No matter how an expensive
jewel is empty to me .
It is love of your eterni
ty that I want .

(E . M .)

4)

バスを降りると、外は凍えそうな寒さだった。吐く息が白く尾を引いた。

自宅のマンションの前を通り、ふと上を見上げると空には、凍えそうな月が輝いていた。何気に自分の部屋に視線をそらす。

アレックス以外、誰もいないはずのエリカの部屋に、ぼんやりと明りが灯っていた。

あれ？

台所の電気付けっぱなしにしてきたかな。

3階まで階段を駆け上がり、ドアを開けた。

部屋の中は真っ暗だ。エリカは錯覚だったのかと思った。ところが部屋の灯りを点けてギョツとした。

ソファに腰掛けたアレックスが眼に入った。アレックスはパジャマ姿のまま、後ろを向いてテレビでも見ているような格好をしていた。

そ、そんなばかな・・・

エリカは恐る恐る、ソファの前に周りアレックスの顔を見た。アレックスは青い、透きとおるような瞳でエリカを見つめた。しかし、

その瞳に感情はない。

「今日の朝は確かベッドに入っていたはずだよね。だけど今朝はぎりぎりに起きて急いで出て行ったから、よく覚えていないなあ。

でも、昨日の夜は疲れててベッドに入っすぐ寝ちゃったし。アレックス、昨日の晩からずっと此処にいたっけ……。うーん、あたしの頭おかしくなっちゃったのかなあ。それとも、アレックス。あんたひとり起きてテレビでも見てたの？」

エリカはアレックスの顔をのぞき込んだ。アレックスは無表情だった。

「な、わけないよね。だったら、いいんだけどね。アレックス」

エリカはため息をつき、クリスマスのプレゼントを開けた。何も言わないアレックスの頭に帽子を被せ、マフラーを巻いた。

「すごく似合ってるよ」

アレックスの顔が、心なし微笑んで見えた。

「それからね。今日はまだ、驚かすことがあるんだ。ちょっと待っててね」

エリカは突然立ち上がったかと思うと、レースのカーテンを取り外し、ハサミでジョキジョキ切りはじめた。

幅5センチ長さ50センチほどの細長いレースが2枚、幅1メートル程の正方形のレースが1枚。

細長いレースはくるくる巻いて、白いコサージュを2個造った。

正方形のレースを自分の頭に被せると、ウェディング・ベールになった。

コサージユの一つはアレックスのシャツの胸ポケットに挿し、もう一つは自分の髪に挿した。

部屋の灯りを消し、ステンドグラスのキャンドルポットに灯をつけると、二人の姿はステンドグラスの温かな灯りのなかで、かげろふのようにゆらゆらと揺らめいた。

エリカはティファニーの箱を開け、二つのリングをアレックスの目の前に差し出した。

「結婚式だよ。今夜、ふたりだけで・・・」

エリカは指輪の一つをアレックスの左くすり指にはめ、もう一つは自分の指にはめた。

「クリスマス・イブの結婚式って、ありそうでないよね」

そう言って、エリカはリモコンボタンをハグモードにし、アレックスの唇にキスをした。アレックスはしっかりと力強くエリカを抱きしめた。

二人は着ているものを全て脱ぎ、生まれたままの姿でベッドに入った。

「もう、あたし達夫婦になったんだから、恥ずかしいこと何もないよね」

その晩、エリカは思い切って69モードボタンを押した。

それから激しい新婚初夜の儀式を数回に渡って行い、疲れ果て、心地よい眠りの中に落ちて行った。

キッチンの方で物音がした。

眼を開けると、カーテンの隙間から筋状の白い光りが部屋の中に何本も差し込んでいた。

…朝・・・？

隣りにアレックスの気配がない。振り向くとベッドは空だった。

…そんな、ばかな

エリカはベッドから抜け出し、キッチンへ繋がるドアを開けた。そこで見たものは・・・

アレックスだ。

アレックスが立ち上がり、湯を沸かし、コーヒーを入れている。あまりの驚きで言葉もなく、呆然と立ち尽くすエリカにアレックスは言った。

「コーヒーが入ったよ」

アレックスはエリカの脇にやってきて肩を抱きしめた。

「何を、そんなに驚いた顔をしているんだよ」

椅子に座り、エリカは差し出されたコーヒーに口を付けた。

コーヒーカップの脇に小さな包みが置いてあった。赤い包装紙に金色のリボンが掛けられている。

「あ、それね。僕からのクリスマスプレゼント」

箱を開けてみると、美しいプラチナの丸いリングにチェーンが通してある。エリカはそれを手に取った。

「ステキ・・・」

「気に入ってくれた？」

「うん」

「エターナルリングのネックレス」

「エターナルリング？」

「永遠の愛だよ」

「永遠の愛・・・」

「掛けてあげるよ」

アレックスはエリカの後ろに周り、まずエリカ的首筋にキスをした。そして、後ろから手を回し、ネックレスを首に掛けた。

「ちょっと、きついみたい・・・」

チエーンが首を締め付けた

アレックスは何も言わない。

「苦しいよ、アレックス」

首に掛かったチエーンはどんどん締め付けられていく。

「アレックス、やめて・・・」

アレックスは無言のまま、エリカの鎖を締め続けた。

エリカはとうとう息ができなくなった。

眼が覚めた。

窓の外は真っ暗だった。

エリカは暗闇の中で隣りを振り返った。

アレックスは眼を瞑って眠っている。

夢・・・だったのか。

眼が覚めても、呼吸は苦しく、夜が明けるまでエリカの恐怖は去らなかつた。

9階の食堂からは左手に東京タワーが見渡せた。右手には東京湾。水上ボートが海面に尾を引き、ゆっくりと移動して行った。海の向こうに広がる、かすんだ空の色に春の気配を感じた。

エリカは社員食堂で数人の同僚と昼食を食べていた。スプーンでカレーを口に運んだとき、いきなり吐き気に襲われた。

「大丈夫？」

目の前で食べていた、同僚の明日香が、心配そうにエリカの顔を覗き込んだ。

「うん、なんだか食欲なくて・・・」

「最近エリカ顔色悪いよ」

「そう？」

「妊娠でもしたんじゃない」

「妊娠？まさか。ありえない」

「最近付き合い悪いし・・・」

「ありえるわけじゃないじゃん！そんなこと」

強く否定したエリカだったが、月のものはずっと遅れていた。ホルモンバランスの崩れだと思い、放っておいたが、もう3月だ。今年に入ってから、まだ一度も生理はきていない。しかし、妊娠などはない。ありえる筈もない。

胸がムカムカし、吐き気は治まらない。エリカは昼食には一口も手を付けずに洗面所に立った。

胃の奥から何かが一気にこみ上げてきた。黄色いどろどろした液体が洗面台の中に流れ落ちた。口をゆすぎ、目の前に映る自分の顔を見た。

眼は落ち窪み、下まぶたに紫色の隈ができていた。

「なんて哀しい顔をしているんだろう。あたし・・・」

エリカの眼から、突然、涙が溢れ出した。エリカは嗚咽と共に洗面台の中に顔を埋めながら、吐いても吐いてもこみ上げてくる何かを、涙と共に吐き続けた。

翌日、エリカは有給休暇を取り、思い切つて産婦人科を訪れた。

「おめでとございます。」

内診を終え、問診室に戻ると医師が言った。

「えっ？」

「ご妊娠です」

「妊娠？」

「3ヶ月です」

医師はエコーで撮った子宮内の写真をエリカに見せた。子宮の中にくつきりと赤ん坊のような形が映っていた。

「うそっ」

「間違いありません。予定日は10月です」

頭の中から血の気が引いていった。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい」

エリカは看護婦に付き添われ、受付で様々な説明を受けたあと、次回の検診の予約をして、外に出た。

妊娠・・・という言葉だけがエリカの頭の中を駆け巡った。相手はアレックス以外に考えられない。

身体に力が入らなかつた。エリカはふらふらと歩き、近くの公園のベンチに腰掛けた。

公園のまわりを囲むように植樹された桜の枝には、紅みを増し、ふつくらとたわなに膨らんだ蕾が、一斉に開花の号令を待っているかのように見えた。

目の前で、ベビーカーを押す母親や、子供たちの遊びまわる声が聞こえてきた。エリカは自分の腹部を触ってみた。

「ここにあたしの赤ちゃんが宿っている。間違いなく宿っているのだ。」

あたしとアレックスの赤ちゃん。かわいいだろうな。

瞳は何色で生まれてくるんだろう。

アレックス似の女の子だったら超美人になるに違いない。

長い時間、はしゃぎまわる子供たちの姿を無心に見つめていたエリカだったが、意を決したように突然立ち上がり、心の中で強い決心をした。

「産もう！あたしはお母さんになる」

下腹部が目立ち始めると、エリカは母親の具合が悪いからという理由で、会社を退職した。誰にも話さなかった。話せることではなかった。少しばかりの蓄えで、ひとりで子供を産み、ひとりで育てる準備を始めた。

しかし、エリカにはアレックスがいた。

自分の子宮の中にアレックスの赤ん坊が宿っているのだ。

アレックスは最早ラバー樹脂製の只の人形ではなかった。

エリカの言葉に反応して会話をするわけではなかったが、アレックスの中には確かに魂が宿っていた。

エリカは魂でアレックスに語りかけた。アレックスの喜びや悲しみもエリカの心に直接響いた。

そう、エリカはひとりではなかった。

そうして月日は経ち、エリカの腹部も目立って前に突き出してき

た。夏に青々と茂った青葉が散り始める頃、一回目の陣痛を感じた。

「じゃ、行ってくるからね。あなたの赤ちゃん連れて帰ってくるから、楽しみに待っていてね。アレックス」

エリカは、ベッドの上で横たわるアレックスの唇に軽くキスをして言った。

「なによ。そんな哀しそうな顔をして見つめないで。一週間もしたら、すぐに帰ってくるんだから。今度は私たちの赤ちゃんと一緒にだよ」

アレックスの頬に自分の頬をくっつけたまま、暫くじつとしていたエリカは思い切って、リモコンのおやすみモードボタンをONにした。

「行ってくるね」

そして、家を出た。

6)

ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜
ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜

病院の分娩控え室の中には、すでにお産を控えたひとりの妊婦が、ラマーズ呼吸法を使いベッドの上でうめいていた。

「せ、せんせ〜！ なんとかしてえ！ もう産まれるう〜！

ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜

ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜

妊婦は激しい陣痛に耐え切れず、大声で叫んだ。

「まだ！まだ、まだ、いきんではいけませんっ！子宮口が全開大になつてから！」

産婦人科の医師は妊婦を叱り付けるように言った。

「だって、だって、もうだめえ〜！いきませて〜！！」

「もう、ちよつとだ！辛抱しなさいっ！！」

「もうやだあーっ！っ！ひひ ふう〜 ひひ ふう〜」

なんとかしてえっ！！あっ！あっ！

ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ふひっふひ・・・

「気をしっかりもって！」

助産婦が言った。

「ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜 ひひ ふう〜」

ぐっぐっぐげげげ！！！！」

「先生っ！大丈夫なんですか？由里がこんなにも苦しんでいます。なんとかしてください！お願いしますよう」

妊婦の側に付き添っていた、気の弱そうな夫が医師の白衣の裾を掴んでいった。

医師はそれには答えず、妊婦の両足の間に腕を突っ込んで言った。

「よおしっ！子宮口全開大！大至急分娩室移動っ！！！！」

産科の医師が大声で叫ぶと、助産婦はじめ数人の看護婦たちが機敏な動作で、妊婦をストレッチャーに載せ、分娩室へ運んで行った。

分娩室からは、人間のものとも思えないおぞましい叫び声があがった。エリカはベッドの上で両耳を塞ぎ、恐怖に震えてた。

獣の遠吠えのような叫び声は間髪なく暫く続き、そがてその声は、赤ん坊の泣き声に変わった。

「驚いたでしょ？あんなに大声をだすからね。でも、もう大丈夫。無事に産まれましたからね。あなたももうすぐよ。がんばってね」

ひとりの看護婦が、エリカのベッドの脇にやってくると、エリカの手を握って言った。

エリカは、聖母マリアのような微笑みをたたえた看護婦の手を強く握りかえし、心の中でアレックスの名を呼んだ。

早く赤ん坊を抱っこして、アレックスの元に帰りたい。赤ん坊は間違いなく、お腹の内側で動いている。家に帰って3人で暮らせば、今までよりもっともっと楽しくなるに違いない。

エリカは思った。

陣痛の間隔は、次第に狭まってきた。

陣痛の波がエリカを襲うたび、エリカはベッドの端を掴み必死で堪えた。額から汗がたらたらと流れた。天井の四隅が歪んで見えた。エリカは独りで堪えた。

「では、そろそろ移動しましょうね」

助産婦が言った。

分娩台の上に載せられたエリカの意識は、朦朧としていた。朦朧とした頭の中に、恐怖と期待が入り混じった。

自分の意思とは無関係に子宮が収縮するたび、身体全体が硬直し、それと同時に涙や汗が止まることなく流れた。

痛みが最高潮に達したとき、医師が言った。

「はいっ！いきんで！」

それでもエリカは朦朧とした意識の中で、医師の言葉をしっかりと受けとめ、下腹部にこん身の力を込めて、思いきりいきんだ。

「ほら！もっと」

エリカの股の向こう側で、医師や看護婦がいつせいにエリカに声

を掛けた。

子宮の入り口から熱いものが一気に流れ出した。腹部が一気に軽くなる。身体が宙に浮いたようだ。大きな赤ん坊の泣き声がエリカの耳に入った。次に看護婦たちのざわめく声が聞こえた。

「あら？お父さんは、外人さんね」
助産婦が言った。

産湯を使い、汚物を綺麗に洗い流された赤ん坊が、タオルに包まれエリカの腕の中に差し出された。

「ほづら、とつても可愛い男の赤ちゃんよ」
エリカの腕の中の赤ん坊の瞳は、深く碧い海のように美しく輝いていた。

看護婦たちが、産後の後片付けをするためエリカの元を離れた。エリカは赤ん坊をしっかりと抱きしめ、母親としての至福の時に浸った。

「ふふ・・・パパと同じ眼をしている」
エリカは赤ん坊を強く抱きしめ、柔らかく弾力のあるその頬にキスをした。
すると赤ん坊は突然口を横に大きく広げ、にやりと笑った。その口の中には茶色く尖った歯が生えていた。
そして、目蓋が大きく見開かれると、青い瞳は一瞬にして充血し、赤黒く変色した。

赤ん坊は呆然とするエリカの腕の中から、素早い動作で這い出すと、分娩台の脇に置いてあったストレッチャーの上に勢いよく跳び

移った。

そして、ストレッチャーの上に置いてあったトレイの中から、会陰部切開用のメスを取り上げると、またエリカの身体の上に飛び乗り、メスを振り上げた。

恐怖の余り、身体は硬直し、エリカは声を出す事も出来なかった。赤ん坊は微動だにできずにいるエリカの耳元に口を近づけ、囁いた。

「ご注文ありがとうございました」

そして、エリカの喉元にメスを突き刺し、横一文字に掻き裂いた。ぱっくりと開いたエリカの喉元から、赤く生暖かい鮮血が噴水の様にほとばしった。

トレイを洗浄しようとして、戻った看護婦の眼に映ったものは、真っ赤な血の海の中に浮き上がった、青白いエリカの死体だけだった。

どんなに改心し、どんなに許しを

乞うたところで、情状酌量の余地はない

何故ならこの世は・・・

生まれながらにして罪を背負ってきた

罪人たちの処刑場なのだから・・・

ヤヌスの使者

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3007b/>

ヤヌスの使者

2011年1月26日00時14分発行